



## 不妊・去勢手術について



今回は、前回の「猫のワクチンについて」に続き、不妊・去勢についてお話ししましょう。

不妊・去勢手術は子犬や子猫を産ませないために有効な方法です。またそのほかに性ホルモンに関係する病気の予防、問題行動の抑制、および生活の質の向上など多くのメリットがあるため、多くの犬や猫で不妊去勢手術が行なわれています。

### 不妊去勢手術の方法

不妊去勢手術はまず全身麻酔を行ない完全に意識がなくなった状態にします。オスの場合は精巣を摘出し、メスの場合は卵巣（または卵巣と子宮）を摘出し、永久的に妊娠が出来なくなります。



### 不妊去勢手術のメリット

去勢手術（雄）

- ・ マーキングが減少する。（癖になっていると減少しない場合もある）
- ・ 攻撃性が軽減する。
- ・ マウンティングが減少する。
- ・ 前立腺肥大、精巣腫瘍などの予防効果がある。

不妊手術（メス）

- ・ 発情がなくなる。
  - ・ 乳腺腫瘍、子宮蓄膿症、卵巣腫瘍などの病気の予防効果がある。
- などがあります。

雄犬の場合、生後6ヶ月を過ぎてくると、マーキングをする犬が増えてきます。そのため、去勢手術は生後6ヶ月くらいで行なうことをお勧めします。マーキングが癖になっている場合、去勢手術を行なっても改善しないこともあります。

雄猫の場合、雌の奪い合いや縄張り争いによるケンカや交通事故、およびケンカや交尾に伴う猫白血病ウイルスや猫免疫不全ウイルスへの感染が多くみられます。また屋内環境の猫ではスプレー行為（臭いの強い尿をいろいろな場所に霧状に吹きかける行為）が認められるため、これらの行為を予防するためにも去勢手術はとても有効です。ただし犬同様手術時期が遅い場合には去勢手術を行なっても改善しないこともあります。やはり生後6ヶ月くらいでの手術をお勧めします。

雌犬の場合、約生後7ヶ月～10ヶ月くらいになると初めての発情があります。乳腺腫瘍を予防するためには、この発情の前に不妊手術をすることが重要になります。初回の発情後に避妊手術を行うとその予防効果は徐々に低くなり、2歳半を過ぎると、不妊手術をしてもしなくても、乳腺腫瘍の発生率には変わりがなくなると言われています。ただし、2歳半を過ぎて不妊手術を行っても、子宮に膿が溜まる子宮蓄膿症という病気を防ぐことは出来ます。以上のことから、生後6ヵ月前後での不妊手術は、雌の犬にとって病気予防の面から大きなメリットがあります。

雌猫の場合、1年に数回発情があり、雄猫を求めて夜になると通常と異なる大きな声で鳴くようになり、トイレとは違うところで排泄したり、飼い主さんの足にまとわりついたりして、飼い主さんが夜寝れなくなるという問合せが動物病院に多く寄せられます。そのためこれらの発情時に起こる行動を抑制するためにも、やはり生後6ヵ月前後での不妊手術をお勧めしています。

## 不妊去勢手術のデメリット

不妊去勢手術もいいことばかりではありません。手術には全身麻酔が必要になりますので、麻酔による危険性が少しあります。ただし手術時の年齢、犬猫

の種類によっても危険性は大きく変わります。

また手術後に肥満になる犬猫が多く。しっかりとした食事管理と運動をする必要があります。

## 最後に

不妊去勢手術についてはメリット、デメリットを勘案し、それぞれの健康状態も加味して考えなければなりません。かかりつけの動物病院の先生とよく相談して、するかしないか、またいつするのが良いか決めてください。

